

# 小学生のレジリエンスと攻撃性との関連

A Study on Resilience and Aggression among Elementary School Children

石田敦子\*, 村松常司\*\*, 服部祐児\*\*\*, 廣美里\*\*\*\*  
廣紀江\*\*\*\*\*, 服部洋児\*\*\*\*\*, 田中清子\*\*\*\*\*, 出川久枝\*\*\*\*\*

Atsuko Ishida, Tsuneji Muramatsu, Yuji Hattori, Misato Hiro  
Norie Hiro, Yoji Hattori, Kiyoko Tanaka, Hisae Degawa

キーワード：攻撃性，小学生，レジリエンス

Keyword: Aggression, Elementary School Children, Resilience

## 要約

本研究は、小学校4～6年生974名（男子467名，女子507名）を対象にして、レジリエンスと攻撃性の関連を追究することを目的とした。攻撃性23項目中10項目の訴え率に性差が認められ、すべて男子の方が高く、特に顕著であったのが身体的攻撃項目であった。

レジリエンスと攻撃得点との関連では、身体的攻撃得点、短気得点、敵意得点の3つにおいて、レジリエンスが高い者の攻撃得点が低いことが認められた。また、逆にレジリエンスが高いと言語的攻撃得点は高いことが分かった。レジリエンスと攻撃性の関係は一定の傾向があるのではなく、攻撃性の持つ側面によって関連が異なることが示された。以上の結果から、言語的攻撃性が高まらない工夫を、レジリエンス向上プログラムに同時に取り入れることが必要であることが示された。

## Abstract

The purpose of this study is to investigate the relationship between resilience and aggression of elementary school children by using data from 974 elementary school fourth, fifth, and sixth graders (467 males and 507 females). Results indicated the aggression scores of boys were significantly higher than girls' scores in ten items out of 23, especially in items related

---

\* 東海学園大学教育学部教育学科

\*\* 東海学園大学スポーツ健康学部スポーツ健康学科

\*\*\* 東海学園大学経営学部経営学科

\*\*\*\* 名古屋学院大学スポーツ健康学部

\*\*\*\*\* 学習院大学スポーツ健康科学センター

\*\*\*\*\* 愛知工業大学経営学部経営学科

\*\*\*\*\* 愛知みずほ大学人間科学部心身健康科学

\*\*\*\*\* 名古屋市立自由ヶ丘小学校

with physical attack. Boys who were high in resilience scores showed lower scores in physical attack, hotheadedness, and hostility, but, on the other hand, showed higher scores in verbal attack. These findings imply that we have to include contents that can control children's desire for verbal attack in the learning program for improving children's resilience.

## I. はじめに

レジリエンスは青少年の育成すべき能力として注目されている概念であり、日本語としては精神的回復力<sup>1)</sup>が使用されている。その定義は研究者によって独自性<sup>2)</sup>があり、様々であるが、本研究では Masten ら<sup>3)</sup>の「困難な状況にもかかわらず、うまく適応できる過程、能力あるいは結果とする」を定義として採用する。日常生活の様々なストレスやネガティブな出来事は個人の精神的健康などに影響を与えているが、すべての人が抑うつや不健康状態に陥るわけではない。一般的に、レジリエンスは日常生活の安定性やストレス対処にプラスの効果をもたらす可能性が大きいと報告されている<sup>4)</sup>。

石田ら<sup>5)</sup>は、嶋田らの攻撃性尺度<sup>6)</sup>を使用して、小学生のいじめられた経験と攻撃性の関係を調査し、いじめを受けた経験、特に「いじめを受けてその影響が大変だったとする」群は攻撃性が高まる可能性があると考えしている。従って、いじめ予防対策は極めて重要であることが窺える。

濱口<sup>7)</sup>は、攻撃性はいじめや児童間の暴力、教師への暴力や非行との関係が深いことを指摘している。前田<sup>8)</sup>は、攻撃性はいじめや暴力、非行との関係が深く、攻撃性の強い子どもは仲間を拒否する、又は仲間から拒否されやすいことを報告しており、石田ら<sup>9)</sup>は、攻撃性の高い小学生はレジリエンスが低いことを報告している。

安藤ら<sup>10)</sup>は、攻撃性を多くの側面からなる複合的な特性として捉え、4つの下位尺度（身体的攻撃、短気、言語的攻撃、敵意）によって多元的に Buss-Perry の尺度の妥当性を検討した上で、大学生では短気以外すべての得点において男子の方が高いことを報告している。松下ら<sup>11)</sup>は、中学生の攻撃性を同様の方法で調査を行い、身体的攻撃得点と言語的攻撃得点は男子が、短気得点と敵意得点は女子が高く、加えてセルフエスティームと社会的スキルが高い者は言語的攻撃が高いと報告している。このように大学生と中学生の攻撃性全体の傾向と下位尺度別の傾向および性差にはそれぞれの特徴があることが分かる。

そこで、この攻撃性の特徴は小学生にも出現していることが予想されることから、本研究では、小学生の攻撃性とレジリエンスの関連を追究する。

## II. 研究方法

### 1. 分析対象者

愛知県内の4つの小学校の4～6年生1004名(当日欠席者は除く)に調査票を配布・回収し、そのうち、①性別無回答の者、②レジリエンス項目に無回答のある者、及び、③無回答項目の多い者を除いた974名(男子467名、女子507名)を分析対象者とした。従って、有効回答者率は97.0%であった。

### 2. 調査方法

調査は無記名自己記入式の質問紙を用いて各小学校のホームルームの時間を利用して行った。調査時期は2015年9月～12月であった。

### 3. 調査内容

本調査は小学生の生活習慣、社会的スキル、攻撃性、セルフエスティーム、レジリエンスを同時に調査し、今回は攻撃性とレジリエンスの結果を抽出して論述した。調査票は、小学校教諭の協力を得て、小学生が理解しやすいように、意味合いは同じで表現を変え、ふりがなを付けた。

#### (1) レジリエンス

レジリエンスの測定は、小塩ら<sup>1)</sup>の精神的回復力尺度21項目を使用した。回答は「はい」、「どちらかといえばはい」、「どちらでもない」、「どちらかといえばいいえ」、「いいえ」の5段階で行った。

#### (2) 攻撃性

攻撃性の測定は、下位尺度に言語的攻撃(5項目)、身体的攻撃(6項目)、短気(6項目)、敵意(6項目)から構成される嶋田ら<sup>6)</sup>の攻撃性尺度23項目を使用した。回答は「とてもよくあてはまる」、「よくあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の4段階で行った。

### 4. 分析方法

#### (1) レジリエンス

レジリエンスの得点化は、「はい」5点、「どちらかというとはい」4点、「どちらでもない」3点、「どちらかというといいえ」2点、「いいえ」1点の5段階で回答させ、逆転項目は配点を逆にして合計をレジリエンス得点とした。レジリエンス得点が高いことは精神的回復力が高い。

#### (2) 攻撃性

攻撃性の得点化は、項目13の「かっとなってもすぐにおさまる」及び項目22の「どんな時でも人を叩いたり、蹴ったりしてはいけないと思う」の2項目(表1参照)は、「まったくあてはまら

ない」を4点, 「あまりあてはまらない」を3点, 「よくあてはまる」を2点「とてもよくあてはまる」を1点とした。他の項目は「とてもよくあてはまる」を4点, 「よくあてはまる」を3点, 「あまりあてはまらない」を2点, 「よくあてはまる」を1点とし, 23項目の合計を攻撃性得点とした。高得点ほど攻撃性は高い。

表1. 攻撃性項目の「とてもよくあてはまる」+「よくあてはまる」の割合(%)

因子	攻撃性項目	性別		
		男子 N (%)	女子 N (%)	合計 N (%)
言語的 攻撃	2. いやな時はいやだとはっきり言う	311(66.6)	314(62.1)	625(64.2)
	19. やりたいと思ったことはやりたいとはっきり言う	294(63.0)	310(61.3)	604(62.1)
	7. じゃまをする人がいたら文句を言う	249(53.4)**	207(40.9)	456(46.9)
	6. 友達の考えに賛成できない時ははっきり言う	213(45.6)	223(44.1)	436(44.8)
	1. 友達と考えが合わない時自分の考えを通そうとする	139(29.8)**	101(16.9)	240(24.7)
身体的 攻撃	22. どんな時でも人を叩いたり蹴ってはいけない(逆)	229(49.1)**	183(36.2)	412(42.4)
	3. 叩かれたり蹴られたりしたら必ずやり返す	206(44.3)**	161(31.8)	367(37.8)
	18. 叩かれたら叩き返す	204(43.7)**	155(30.7)	359(36.9)
	17. 人に乱暴なことをしたことがある	200(42.8)**	136(26.9)	336(34.5)
	9. からかわれたら叩いたり蹴ったりするかもしれない	160(34.6)**	119(23.7)	279(28.9)
12. 自分を守るためなら暴力をふるうのも仕方ない	174(37.3)**	90(17.8)	264(27.1)	
短 気	13. かつとなってもすぐおさまる(逆)	231(49.9)	236(46.6)	467(48.2)
	8. すぐ怒る方だ	180(38.6)	199(39.3)	379(39.0)
	23. よく口げんかをする	190(40.7)	186(36.7)	376(38.6)
	4. 友達とけんかをすることがある	198(42.5)*	177(34.9)	375(38.5)
	15. ちょっとしたことでも腹が立つ	113(24.2)	146(28.9)	259(26.7)
10. すぐけんかをしてしまう	112(24.1)	101(20.0)	213(22.0)	
敵 意	16. 普段仲良くても困った時助けてくれない友達もいる	196(42.2)	220(43.5)	416(42.8)
	11. 人から馬鹿にされたり意地悪されたことがある	210(45.1)*	191(37.7)	401(41.3)
	5. 友達に馬鹿にされているかもしれない	160(34.4)	161(31.8)	321(33.0)
	21. 私の悪口を言う人が多いと思う	120(25.8)	140(27.7)	260(26.8)
	20. 本気でいやだと思う人がたくさんいる	120(25.8)	124(24.5)	244(25.1)
14. 友だちの中にはいやな人は多い	101(21.7)	128(25.2)	229(23.5)	

- 1)  $\chi^2$ 検定を行い性別の比較を行った。df = 1、\*\* : P < 0.01、\* : P < 0.05
- 2) (逆)は「まったくあてはまらない」+「あまりあてはまらない」の割合を示す。
- 3) 4因子別に回答の割合が多い順に掲載した。
- 4) 攻撃性項目の番号は調査票の質問順を示す。

### (3) 攻撃性の下位尺度の得点化

攻撃性の4つの下位尺度(表1参照)の得点化は以下のように行った。言語的攻撃得点は項目1, 2, 6, 7, 19の合計, 身体的攻撃得点は項目3, 9, 12, 17, 18, 22の合計, 短気得点は項目4, 8, 10, 13, 15, 23の合計, 敵意得点は項目5, 11, 14, 16, 20, 21の合計を各得点とした。得点

が高いことは攻撃性が高い。

#### (4) レジリエンス 3 群の分け方

対象者 974 名のレジリエンス得点分布の低い方から 33.3% 毎に 3 群に分け、低群、中群、高群とした。しかし、同じ得点は同じ群にしたので 3 群は正確に 33.3% ごとになっていない。従って、低群 321 名 (男子 156 名, 女子 165 名), 中群 351 名 (男子 165 名, 女子 186 名), 高群 302 名 (男子 146 名, 女子 156 名) となった。

### 5. 比較の方法

データ処理に当たっては統計パッケージ IBM SPSS statistics ver.24 を使用した。回答の割合の比較には  $\chi^2$  検定を、2 群間の平均値の差の検定には t 検定を、多群間の平均値の差の検定には一元配置分散分析 (Bonferroni) を使用して比較した。

### 6. レジリエンスと攻撃性の尺度の信頼性

本研究で用いたレジリエンスと攻撃性の尺度の信頼性はクロンバックの  $\alpha$  係数を算出して確認した。その結果、レジリエンス尺度 21 項目全体の  $\alpha$  係数は 0.830 であった。次いで、攻撃性尺度 23 項目全体の  $\alpha$  係数は 0.857 であり、下位尺度の言語的攻撃 5 項目は 0.587, 身体的攻撃 6 項目は 0.827, 短気 6 項目は 0.803, 敵意 6 項目は 0.758 であった。いずれの尺度も内部一貫性が認められる数値が得られている。

### 7. 倫理的配慮

本調査を実施するに当たって、学校長に、研究の趣旨、プライバシーの保護、児童の保健管理・保健指導に活用するなど説明した上で同意を得た。対象者が調査票に回答することで了解と判断した。本研究は、東海学園大学研究倫理委員会の審査 (研究倫理 24 - 12) を受け了承を得ている。

## Ⅲ. 研究結果

### 1. 攻撃性項目の訴え率

(1) 「とても良く当てはまる + よくあてはまる」の割合

攻撃性項目の「とても良く当てはまる + よくあてはまる」の割合を表 1 に示した。攻撃性の 23 項目の中で最も高い訴え率は「いやな時はいやだとはっきり言う」の 64.2% であり、次いで「やりたいと思ったことはやりたいとはっきり言う」であった。一方、最も低かった項目は「すぐけんかをしてしまう」の 22.0% であり、次いで、「友だちの中にはいやな人は多い」であった。言語的攻撃項目の中では「いやな時はいやだとはっきり言う」が 64.2% と最も多く、「じゃまをする人

がいたら文句を言う」,「友達と考えが合わない時自分の考えを通そうとする」には性差がみられ、いずれも男子の方が高いことが認められた。身体的攻撃項目では「どんな時でも人を叩いたり蹴ってはいけない(逆)」が42.4%と最も高く、6項目すべてに男子の方が高いことが認められた。短気項目では「かっとなってもすぐおさまる(逆)」が48.2%と最も高く、「友達とけんかをすることがある」に性差がみられ、男子の方が高いことが認められた。敵意項目では「普段仲良くても困ったときに助けてくれない友達もいる」が42.8%と最も高く、「人から馬鹿にされたり意地悪されたことがある」に性差がみられ、男子の方が有意に高いことが認められた。表1に示すように、今回使用した攻撃性項目23項目中10項目の訴え率に有意差が認められ、すべて男子の方が高かった。

## (2) 性別にみた攻撃性得点

4つの下位尺度得点を性別に表2に示した。言語的攻撃得点と身体的攻撃得点に性差がみられ、いずれも男子の方が高く、短気得点、敵意得点には性差はみられなかった。また、攻撃性の合計得点においては性差がみられ、男子の方が有意に高いことが認められた。

表2. 性別にみた4因子の攻撃得点

因子	性別	人数	平均(標準偏差)
言語的攻撃 因子得点	男子	465	13.2(3.0)
	女子	503	12.6(2.9)
身体的攻撃 因子得点	男子	460	14.2(4.4)
	女子	498	12.0(4.2)
短気 因子得点	男子	458	13.4(4.1)
	女子	501	13.1(4.2)
敵意 因子得点	男子	457	13.0(4.2)
	女子	504	13.1(4.0)
攻撃性得点 (合計)	男子	441	53.9(11.5)
	女子	485	51.0(11.1)

\*\* :  $P < 0.01$ 、NS : 無意、t検定

## 2. レジリエンス得点からみた各攻撃得点

### (1) 言語的攻撃得点

表3に示すように、男子のレジリエンス3群からみた言語的攻撃得点は、低群12.6(3.1)、中群13.3(2.7)、高群13.7(3.1)であり、3群間に有意差がみられ、多重比較では低群<高群であり、高群が最も高かった。また、表4に示すように、女子の言語的攻撃得点は3群間には有意差はなかった。

表 3. レジリエンス得点 3 群からみた言語的攻撃得点 (男子)

レジリエンス 3 群	N	言語的攻撃得点 平均 (S D)	F 値	P 値
高 群	146	13.7(3.1)	5.424	0.005
中 群	164	13.3(2.7)		
低 群	155	12.6(3.1)		
多重比較		低群 < 高群		

多重比較：P &lt; 0.05

表 4. レジリエンス得点 3 群からみた言語的攻撃得点 (女子)

レジリエンス 3 群	N	言語的攻撃得点 平均 (S D)	F 値	P 値
高 群	154	12.9(2.8)	2.874	0.057
中 群	185	12.8(2.8)		
低 群	164	12.2(2.9)		
多重比較		N.S.		

多重比較：N.S. (無意)

## (2) 身体的攻撃得点

表 5 に示すように、男子のレジリエンス 3 群からみた身体的攻撃得点は、低群 16.1(4.1)、中群 13.8(4.3)、高群 12.5(3.8)であり、3 群間に有意差がみられ、多重比較では低群 > 中群 > 高群であった。また、表 6 に示すように、女子の身体的攻撃得点は同様に 3 群間に有意差がみられ、多重比較では低群 > 中群 > 高群であった。男女とも高群が最も低かった。

表 5. レジリエンス得点 3 群からみた身体的攻撃得点 (男子)

レジリエンス 3 群	N	身体的攻撃得点 平均 (S D)	F 値	P 値
高 群	145	12.5(3.8)	29.518	0.000
中 群	161	13.8(4.3)		
低 群	154	16.1(4.1)		
多重比較		低群 > 中群 > 高群		

多重比較：P &lt; 0.05

表 6. レジリエンス得点 3 群からみた身体的攻撃得点 (女子)

レジリエンス 3 群	N	短気得点 平均 (S D)	F 値	P 値
高 群	152	10.4(3.5)	22.177	0.000
中 群	182	12.1(4.2)		
低 群	164	13.4(4.3)		
多重比較		低群 > 中群 > 高群		

多重比較：P &lt; 0.05

## (3) 短気得点

表7に示すように、男子のレジリエンス3群からみた短気得点は、低群15.1(4.1)、中群13.4(3.8)、高群11.5(3.0)であり、3群間に有意差がみられ、多重比較では低群>中群>高群であった。また、表8に示すように、女子の短気得点は同様に3群間に有意差がみられ、多重比較では低群>中群>高群であった。男女とも高群が最も低かった。

表7. レジリエンス得点3群からみた短気得点 (男子)

レジリエンス 3群	N	短気得点 平均 (SD)	F値	P値
高 群	144	11.5(3.5)	33.941	0.000
中 群	163	13.4(3.8)		
低 群	151	15.1(4.1)		
多重比較		低群 > 中群 > 高群		

多重比較：P < 0.05

表8. レジリエンス得点3群からみた短気得点 (女子)

レジリエンス 3群	N	敵意得点 平均 (SD)	F値	P値
高 群	155	11.2(3.4)	29.617	0.000
中 群	183	13.4(4.1)		
低 群	163	14.5(4.3)		
多重比較		低群 > 中群 > 高群		

多重比較：P < 0.05

## (4) 敵意得点

表9に示すように、男子のレジリエンス3群間からみた敵意得点は、低群13.9(3.9)、中群13.4(4.4)、高群11.6(4.0)であり、3群間に有意差がみられ、多重比較では低群・中群>高群であった。また、表10に示すように、女子の敵意得点は3群間に有意差がみられ、多重比較では低群・中群>高群であった。男女とも高群が最も低かった。

表9. レジリエンス得点3群からみた敵意得点 (男子)

レジリエンス 3群	N	攻撃得点 平均 (SD)	F値	P値
高 群	142	11.6(4.0)	13.578	0.000
中 群	161	13.4(4.4)		
低 群	154	13.9(3.9)		
多重比較		低群 > 中群 > 高群		

多重比較：P < 0.05

表 10. レジリエンス得点 3 群からみた敵意得点 (女子)

レジリエンス 3 群	N	攻撃得点 平均 (S D)	F 値	P 値
高 群	155	11.5(3.7)	20.838	0.000
中 群	185	13.3(3.7)		
低 群	164	14.3(4.1)		
多重比較		低群 > 中群 > 高群		

多重比較：P &lt; 0.05

## (5) 攻撃性の合計得点

表 11 に示すように、男子のレジリエンス 3 群間からみた攻撃性の合計得点は、低群 57.4 (11.4)、中群 54.0(11.5)、高群 50.0(10.3)であり、3 群間に有意差がみられ、多重比較では低群 > 中群 > 高群であった。また、表 12 に示すように、女子の攻撃性得点は 3 群間に有意差がみられ、多重比較では低群 > 中群 > 高群であった。男女とも高群が最も低かった。

表 11. レジリエンス得点 3 群からみた合計攻撃得点 (男子)

レジリエンス 3 群	N	攻撃得点 平均 (S D)	F 値	P 値
高 群	139	50.0(10.3)	15.543	0.000
中 群	156	54.0(11.5)		
低 群	146	57.4(11.4)		
多重比較		低群 > 中群 > 高群		

多重比較：P &lt; 0.05

表 12. レジリエンス得点 3 群からみた合計攻撃得点 (女子)

レジリエンス 3 群	N	攻撃得点 平均 (S D)	F 値	P 値
高 群	148	47.0(9.8)	17.292	0.000
中 群	177	51.7(10.8)		
低 群	160	54.0(11.6)		
多重比較		低群 > 中群 > 高群		

多重比較：P &lt; 0.05

### 3. 攻撃性下位尺度4因子相互の相関関係

表13、表14に示すように、男女とも攻撃性下位尺度4因子相互の相関関係はいずれも正の相関関係がみられた。

表13. 攻撃性下位尺度4因子相互の相関係数と人数（男子）

	①言語	②身体	③短気	④敵意
①言語的攻撃得点 (人数)		0.270** (459)	0.278** (456)	0.174** (456)
②身体的攻撃得点 (人数)			0.688** (451)	0.431** (451)
③短気得点 (人数)				0.578** (448)
④敵意得点 (人数)				

\*\*：1%水準で有意の Pearson の相関関係が認められた。

表14. 攻撃性下位尺度4因子相互の相関係数と人数（女子）

	①言語	②身体	③短気	④敵意
①言語的攻撃得点 (人数)		0.377** (494)	0.388** (497)	0.169** (500)
②身体的攻撃得点 (人数)			0.667** (451)	0.416** (495)
③短気得点 (人数)				0.579** (498)
④敵意得点 (人数)				

\*\*：1%水準で有意の Pearson の相関関係が認められた。

## IV. 考察

本研究における攻撃性項目の中では、「いやな時はいやだとはっきり言う」の訴え率が64.2%と最も高く、以下、「やりたいと思ったことはやりたいとはっきり言う」、「かっとなってもすぐおさまる（逆）」、「じゃまをする人がいたら文句を言う」が続き、一方、最も低かった項目は「すぐけんかをしてしまう」の22.0%であった。本研究で用いた攻撃性尺度<sup>6)</sup>は23項目あり、そのうち10項目の訴え率に性差が認められ、いずれも男子の方が高く、特に顕著であったのが身体的攻撃の項目であった。また、攻撃性得点の合計を性別に比較してみると、男子53.9(11.5)、女子51.0(11.1)であり、男子の方が高かった。同様に、攻撃性の下位尺度を性別に比較してみると、言語的攻撃と身体的攻撃の得点において、女子より男子の方が高いことが分かった。

安藤ら<sup>10)</sup>は、大学生の攻撃性を4つの下位尺度から調査を行い、短気以外の言語的攻撃、身体的攻撃、敵意はすべて女子より男子の方が高いことを報告している。松下ら<sup>11)</sup>は、同様の尺度で

中学生の調査を行い、身体的攻撃と言語的攻撃は男子の方が、短気と敵意は女子の方が高かったと報告しており、廣ら<sup>12)</sup>は、身体的攻撃は女子より男子の方が高かったと報告している。また、石渡ら<sup>13)</sup>は、今回の下位尺度とは異なる方法で調査して、大学生の怒り得点は女子より男子の方が高いことを報告している。松下ら<sup>11)</sup>は、攻撃性の様々な側面に関して、男子では直接的な攻撃方法、女子では仲間はずれなどの間接的な攻撃方法を用いることが多いとしている。これらの報告や本研究からは、総じて、攻撃性は女子より男子の方が高いことが窺える。

廣ら<sup>12)</sup>は、レジリエンスやセルフエスティームが高い者は攻撃性が低いと報告しているが、松下ら<sup>11)</sup>は、下位尺度の言語的攻撃は、セルフエスティームが高いと逆に高くなると報告している。レジリエンスとセルフエスティームは極めて高い相関関係<sup>4)</sup>があることからレジリエンスが高いと言語的攻撃が高くなることは十分考えられる。そこで、本研究のレジリエンスと言語的攻撃得点との関連をみると、レジリエンス高群の言語的攻撃得点が高いことが示された。

島井<sup>14)</sup>は、言語的攻撃と怒りの主張性はほとんどすべての自己への肯定的な評価との間に高い正の相関があり、自分の権利を主張したり、意見を戦わせたり、怒っていることを伝えるという傾向は、セルフエスティームが高いことと強い関連性を持つとしている。言い換えれば、セルフエスティームの高い者ほど言葉によって相手を攻撃しやすいということになる。本研究の小学生のレジリエンスと言語的攻撃得点との関連をみると、男子においてレジリエンスが高い者の言語的攻撃得点が高いことが認められている。これに対して、身体的攻撃得点、短気得点、敵意得点においては、男女ともレジリエンスが高い者の得点が低いことが認められた。これらの結果はレジリエンスと攻撃性との間には、一定の傾向があるのではなく、攻撃性の持つ側面によってレジリエンスとの関連が異なることを示している。

田中ら<sup>15)</sup>は、大学生のレジリエンスと自尊感情、抑うつ症状、コーピング方略との関連を調査して、個人のレジリエンスを高めるためには、①自尊感情（セルフエスティーム）を高めること、②抑うつ症状を軽減させること、③積極的コーピング（ストレス対処）を行わせること、④回避的コーピングを行わせないようにすることなどの方法が有効であり、これらを取り入れた介入プログラムによるアプローチが有効ではないかとしている。

この田中ら<sup>15)</sup>や廣ら<sup>16)</sup>のレジリエンス向上プログラムの方策の提案は極めて有意義なものとする。そのレジリエンス向上プログラムの中で攻撃性の低減に繋がる実践を行うことを勧めたい。しかし、本研究結果でも、レジリエンスの高い者は言語的攻撃が強いことが認められていることから、レジリエンス向上プログラムには言語的攻撃が強まることを防止する問題解決や批判的思考、効果的ミニユケーション、共感性といったスキルを高める教育を同時に取り入れることが良いと考える。

田中ら<sup>17)</sup>は、小学生のレジリエンスを調査して、小学生はつらい出来事を多く経験しても目の前の問題に対する際に楽観的な認知や行動ができれば、将来に対して明るい展望を持つことがで

きると報告している。また、原ら<sup>18)</sup>も、小学生のレジリエンスを調査して、意図的に子どもたちにうれしいと思わせる経験をさせることで、レジリエンスを高めることができる可能性があり、今後の学校現場での応用が期待されるとしている。少しずつではあるが、近年、レジリエンス向上プログラム作成に参考となる報告<sup>19)20)</sup>が散見できるようになった。本研究では、具体的な方策を示すには至らないが、今後、介入研究を行うことにより、児童・生徒の攻撃性の低減に貢献したい。その一つがレジリエンス向上プログラムの策定と考える。

## V. まとめ

本研究は、小学校4～6年生974名(男子467名,女子507名)を対象にして、レジリエンスと攻撃性の関連を追究し、以下の結果を得た。攻撃性23項目の中で最も高い訴え率であったのは「いやな時はいやだとはっきり言う」の64.2%であり、次いで「やりたいと思ったことはやりたいとはっきり言う」であった。一方、最も低かった項目は「すぐけんかをしてしまう」の22.0%であった。言語的攻撃項目の中では「いやな時はいやだとはっきり言う」の訴えが64.2%と最も高く、身体的攻撃項目では「どんな時でも人を叩いたり蹴ってはいけない(逆)」が42.4%と最も高く、短気項目では「かっとなってもすぐおさまる(逆)」が48.2%と最も高く、敵意項目では「普段仲良くても困ったときに助けてくれない友達もいる」が42.8%と最も高かった。攻撃性23項目中10項目の訴え率に性差が認められ、すべて男子の方が高く、特に顕著であったのが身体的攻撃項目であった。各攻撃得点を性別に比較すると、言語的攻撃得点と身体的攻撃点及び攻撃性の合計得点はいずれも男子の方が高く、総じて攻撃性は男子が高く、また、レジリエンスと攻撃得点との関連では、身体的攻撃得点、短気得点及び敵意得点の3つにおいて、レジリエンスが高い者の攻撃得点が低いことが認められた。これに対して、言語的攻撃得点において、レジリエンスが高い者の攻撃得点が高いことが認められた。この結果は、レジリエンスと攻撃性の関係は一定の傾向があるのではなく、攻撃性の持つ側面によって関連が異なることを示している。本研究では、レジリエンスが高いと攻撃性全体としては低いことが分かった。レジリエンス向上のプログラムには言語的攻撃性が高まらない工夫を同時に取り入れることが必要であることが示されたといえる。

## 参考文献

- 1) 小塩真司, 中谷素之, 金子一史, 長峰伸治 (2002): ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性, 精神的回復力尺度の作成, カウンセリング研究, 35(1), 57-65
- 2) 斉藤和貴, 岡安孝弘 (2009): 最近のレジリエンス研究の動向, 明治大学心理社会学研究, 第4号, 72-84
- 3) Masten AS, Best K. & Garmezy N. (1990): Resilience and Development; Contributions from the study of children who overcome adversity, Development and Psychopathology, 2(4), 425-444

- 4) 村松常司 (2014) : レジリエンスを考える, 東海学校保健研究, 38(1), 3-9
- 5) 石田敦子, 村松常司, 服部祐兒, 廣美里, 他 (2017) : いじめを受けた経験が小学生の心理社会的要因に与える影響について, 東海学校保健研究, 41(1), 53-63
- 6) 嶋田洋徳, 大竹恵子 (1998) : 中学生用攻撃性質問紙 (H A Q S) の作成, 日本心理学会第 62 回大会論文集, 930-931
- 7) 濱口佳和 (2002) : 学校における問題・不適応行動と攻撃性, 攻撃性の行動科学 (発達・教育), 山崎勝之, 島井哲志 (編), 135-151, ナカニシヤ出版, 京都
- 8) 前田健一 (2002) : 攻撃性と仲間関係, 攻撃性の行動科学 (発達・教育編), 122-134, 山崎勝之, 島井哲志 (編), ナカニシヤ出版, 京都
- 9) 石田敦子, 村松常司, 服部祐兒, 廣美里, 他 (2018) : 小学生のレジリエンスに影響を与える要因に関する研究, 生活習慣, 社会的スキル, 攻撃性, セルフエスティームに着目して, 東海学校保健研究, 42(1), 29-39
- 10) 安藤明人, 蘇我祥子, 山崎勝之, 島井哲志, 他 (1999) : 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性, 信頼性の検討, 心理学研究, 70(5), 384-392
- 11) 松下加代子, 村松常司 (2006) : 中学生の攻撃性とセルフエスティーム, 社会的スキルとの関係, 東海学校保健研究, 30(1), 47-60
- 12) 廣美里, 村松常司, 廣紀江 (2013) : レジリエンスからみた大学生の攻撃性および攻撃受動性について, 名古屋学院大学論集 (人文・自然科学篇), 49(2), 43-55
- 13) 石渡博幸, 新田茂 (1987) : State-Trait Anger Scale についての Pilot study IV-A, 日本教育心理学会第 29 回総会発表論文集, 452-453
- 14) 島井哲志 (2002) : 攻撃性とライフスキル教育, 攻撃性と行動科学, 発達・教育編 (島井哲志・山崎勝之編), 194-210, ナカニシヤ出版, 京都
- 15) 田中千晶, 兒玉健一 (2010) : レジリエンスと自尊感情, 抑うつ症状, コーピング方略との関連, 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 第 9 巻, 67-79
- 16) 廣美里, 村松常司, 服部祐兒, 石田敦子, 他 (2013) : 大学生のレジリエンスに影響を与える諸要因に関する研究, 社会的スキル, 生活習慣, 攻撃性, 攻撃受動性に着目して, 東海学校保健研究, 37(1), 3-17
- 17) 田中文夫, 平岡恭一, 吉中淳 (2012) : 小学生のレジリエンスに関する研究, 尺度の作成と信頼性・妥当性及びレジリエンスの機能の検討, 日本教育心理学会総会発表論文集 (第 54 回総会), 591
- 18) 原郁水, 古田真司 (2013) : 小学生のレジリエンスとつらい経験・うれしい経験との関連, 東海学校保健研究, 37(1), 77-87
- 19) 樋口倫子, 橋本佐由理 (2012) : 大学生のレジリエンス向上プログラム, 日本未病システム学会雑誌, 18(2), 57-61
- 20) 原郁水, 都築繁幸 (2014) : 小学校 5 年生のレジリエンス育成プログラムの試行的研究, 障害者教育・福祉学研究, 第 10 巻, 85-90